

『一人じゃないよ』

2006年10月29日(日) 日本キリスト教団姫路教会 特別講演会

名前の由来

ご紹介を頂きました久世そらちです。どこでも必ず「なんでそういう珍しい名前なんですか」と聞かれるので、何の話をするときにも、まず最初に名前の紹介をすることにしております。

「そらち」というのは北海道の地名です。札幌と旭川のあいだあたりに「空知」という地域があります。わたしの両親は東京の人間ですが、北海道に憧れて、結婚して初めて住んだのがその空知の岩見沢と言う町でした。それで、子供が生まれるというとき、「そらち」と言う名前に決めたんだそうです。私が生まれる前に札幌に引っ越ししてしまいましたが、せっかく考えた名前だからというので、そのまま「そらち」になりました。

「そらち」というのはもともとアイヌ語で「滝を下る川」という意味で、現に空知川という川があります。ですから、漢字をあてるのではなく、ひらがなで「そらち」と記します。

札幌での子供時代

札幌では月寒(つきさっぷ)というところに住んで月寒教会に通っておりました。大変大きな教会で、私と妹二人と、三人の子供を抱えて教会に行っていた母は、牧師から「あんたはカッコウだ」と言われたそうです。カッコウと言う鳥の習性は、他の鳥の巣の中に卵を産み付けて、自分はばあっと飛んで行き、ウグイスとか他の鳥がいっしょうけんめい子供を育ててくれるんです。「あんたは教会に子供たち連れてきて、そのままばあっとどこかに行っちゃって、教会のおばさんたちが一生懸命子供を育ててる」と言われるくらい、教会の中でずっと育てられました。

北海道にいたのは4歳ぐらいまででした。それから東京で育ち、神学校を出て、思いがけなくも北海道の教会からお招きをいただき、二十数年ぶりに北海道に住むようになりました。

クラーク博士とその影響

最初に旭川の教会に赴任し、4年前に札幌の方に移りました。札幌のシンボルとして、時計台がよく知られています。この建物は、元々は100年以上前に建てられた札幌農学校の建物の一つです。ご存知のように札幌農学校は今の北海道大学の前身ですが、最初の校長がクラーク博士です。

クラーク博士は、明治維新で新しい国づくりが始まったばかりの日本に、一年だけと頼まれてアメリカから来ました。農学校の開設の準備などは東京でしていますので、実際に札幌に居たのはわずか8ヶ月です。たった8ヶ月の間に、新渡戸稲造とか、内村鑑三とか、キリスト教のリーダーとして活躍した人たちに巨大な影響を残しました。戦後、総理大臣を務めた石橋湛山という人がいます。彼が大変影響を受けた恩師はクラーク博士に直接教えを受けた大島正健でした。ですから、石橋湛山はクラークの孫弟子というわけです。また、札幌で一番古い教会である札幌教会も、クラーク博士の直接の教えを受けた佐藤昌介という後の北大の総長となった方が活躍した教会です。

札幌バンド、横浜バンド、熊本バンド

まだ日本にプロテスタントのキリスト教が入ってまもない頃、その影響を受けた若者たちのグループがあちこちに出来ます。その一つが札幌、また横浜、そして熊本でジェーンズという学校の先生に教えられた若者たちが、後に京都に来て同志社にごそっと入学します。これらのグループをそれぞれ札幌バンド、横浜バンド、熊本バンドと言います。バンドとは音楽のバンドと同じでグループと言う意味です。

クラーク博士の教え＝個人の重要性

これらのグループにはそれぞれ特徴があるのですが、特に札幌で生まれたキリスト教の若者達のグループは大変個人を重んじる個人主義的だという評価をされています。それは、札幌バンドの基となったクラーク博士の、個人としての人間の尊厳を強烈に印象付ける指導によるものだと言われます。

クラーク博士の言葉として有名なのは、8ヶ月間学生たちを教えた後、任期を終えてアメリカに帰るとき、学生たちと別れを惜しんだ時の言葉です。馬で札幌から島松まで行き、もうここでお別れという最後のところで、”Boys, be ambitious!” 「少年よ大志を抱け」と言って別れ去っていったのです。

この言葉ともう一つ、クラーク博士のものとして伝えられている言葉をご存知でしょうか。”Be gentleman!” 「ジェントルマンでありなさい、紳士でありなさい」という言葉です。

これは別れの時ではなくて、一番最初の時の言葉です。札幌に学校を建てるため、学生たちを東京で募集して、船に乗せて札幌まで連れて来るのですが、その学生達は今でいうと中学生から高校生ぐらいの年代で、何日もの船旅の中で退屈し、舟の中でいたずらしたり、騒いだり、大暴れするのです。その時、札幌農学校の責任者だった北海道開拓使長官の黒田清隆は大変怒り、こんな連中は送り返せといきまくのですが、クラークは、こういう若者たちの心の中に大切な規範を育てなければならない、そのためには聖書が大事だといって、学生たちに聖書を配るんです。学校当局のほうでは、この元気一杯の学生達をしつけて教育を施すために、たくさんの規則を作ろうと原案を造ってクラーク校長のところへ持ってきました。ところが、クラークは「いや、私の学校ではそういうものは一切必要ない。この学校の規則は、”Be Gentleman!” 一つでよい」。学生たちに、紳士になれ、そういう自覚を持って、そうしたらおのずから何をなすべきかがわかる、というのです。学生たちは大変びっくりしました。つい先ごろまで江戸時代だったので、いろんな規則や決まり、掟でもって縛られていたのに、今度新しくアメリカから来た先生は、一人一人を大切に、信頼をして、自分自身の良心にのみ従って自らの行いを高めて行けというのです。それだけ皆を信頼してくれることにびっくり仰天するわけです。

もう一つクラーク博士のエピソードがあります。クラーク博士は、非常に気さくに学生たちと今でいうフィールドワークとして植物採集などのためにあちこちでかけました。ある時、何か高い所に珍しいコケがあって、あれを採ってみようということになりました。でも、ちょっと手が届かない。するとクラーク博士は背をかがめて「おお、君、ちょっと僕の背中に乗りなさい」。つい先ごろまでは江戸時代ですから「三尺下がって師の影を踏まず」で、先生の背中を足で踏みつけて踏み台にするなんて、とんでもない。学生は尻込みをするわけです。「君、早く採りなさい」とクラーク博士に促され、恐る恐るその上に乗っかって標本を採ったのが、あの船の中で一番暴れた男だったというんですね。学生たちは、これが新しいあり方か、先生だからといってむやみにたてまつるのではなくて、本当に一人の人間同士として、個人対個人として触れ合い、関係を持ってゆくんだというのを、身をもって衝撃的に味わうわけです。

そんなふうに、江戸時代を縛っていた身分とか封建的関係から解放されて、人間一人ひとりが個人として大事にされる、自分は神様の前でどんな精神や行いを整えて生きてゆかねばならないか、個人の自覚に基づいて形作って行くことが大事なんだ、そういう精神が常に札幌のキリスト教の中には刻み込まれていました。一番端的な形で現れたのが、クラークが去った直後に入学した内村鑑三です。無教会というキリスト教の形を始めたのですが、これはもう極端なまでに個人のキリスト教ですね。

個人を共同体から解放するキリスト教

明治以降、プロテスタントのキリスト教が日本に入ってきた時に、札幌だけではなくてどこでも、キリスト教というのは個人を大事にするんだ、今までのいろんな封建的なしがらみから個人が解放され大事にされて、一人ひとりの存在として生きていくことを支えるのがキリスト教だ、ということが強烈に印象づけられました。このことは日本の近代のキリスト教の大きな特徴です。

またもう一つ、戦後、アメリカからたくさんの宣教師が日本にやって来ます。これまで戦争のために、お国のためにと締め付けられて、一人ひとりが押し殺されていたようなところへ、新しくどっとアメリカの民主主義と共にやってきたキリスト教というのは、やはりそれまでの何か封建的なもの、国家とか古い形の家とかしがらみとかから解放してくれる、一人ひとりが共同体から解放される場として強烈なインパクトがあり、歓迎されたのではないかと思います。

個人を高めるキリスト教

そんなふうに、日本ではキリスト教は、個人を高めるもの、個人の内面を一生懸命に振り返り、その良心を形作り、修養して人間性を高めてゆく、そういうものとして捉えられてきた歴史があります。キリスト教でない一般の方のクリスチャンに対するイメージにも、たぶんそういうものがあると思います。キリスト教の信徒なら、きっとどこかで「クリスチャンとしてそんなことをしていいの？」ということを書かれたことがあるのではないのでしょうか。クリスチャンというと、自分の身を整えて、立派な行いをし、真面目で、悪くいうとちょっと独善的で、ハイカラ、インテリ、ちょっと理屈っぽくて、ときにつきあいが悪いという、そんなイメージがあるかもしれません。

いずれにせよ、キリスト教は、個人を高めるものとして日本では受け止められてきた歴史が背景にあります。教会というのは、共同体のしがらみから一人ひとりが解放される所というイメージが、長い間、あったと思います。

共同体の今日の状況

江戸時代は身分制度に縛られていたし、また戦争に向かう時代も皆のために個人が押さえつけられるという、共同体の圧迫が厳しかったのですけれども、今の時代はどうでしょうか。

今この社会においては、共同体という人間のつながりがいたるところで崩れてしまっているのが実態です。1960年代、高度経済成長の時代以来、世の中は大きく変わりました。日本の人口の大部分は農村に住んでいて、村の暮らしの中に縛り付けられていたのが、人口が都市に移動し、地方の共同体がどんどん壊されてしまいました。また、特にこの10年余り、構造改革をうたって世の中の仕組みを変えることを政府が強力に推し進め、これまでの日本の社会を支えてきた人と人とのつながりのあり方がガラッと変わってしまいました。

共同体の色々

共同体ということについて、もう少し詳しくお話します。共同体というのは人と人とのつながりですが、親戚など血のつながりによる「血縁」の共同体と、同じところに住んでいることによる「地縁」の共同体があります。

血縁共同体

血縁共同体でいえば、昔は、その範囲が広がったと思います。

私のすぐ下の妹も月寒で生まれたのですが、インドネシアの人と結婚をして、ジャカルタに住んでいます。もう国籍もインドネシアに移し、子供も出来ています。私の新婚旅行も、妹のいるインドネシアに行きました。すると妹の夫のお父さんが大変よろこんで、家族みんなを集めてパーティをしてくれました。ぞろっと人が並んで、みんなが私は何者ですと名乗ってくれたのですが、一番すごいのは、私の妹の夫の兄の妻の妹の婚約者、という人が出て来て「We are family!」と握手してきて……。インドネシアではそういう範囲までもが本当にファミリーなんですね。妹の夫はいろんな仕事を変わって行って、仕事についたりつかなかったりしているのですが、インドネシアでは特別なことではありません。ファミリーの中で、誰かが稼いでいれば、そのファミリー皆が食ってゆくというのが当然のことなんです。

こういう血の繋がり共同体というのは、昔は日本でも珍しいことではなかったと思います。私の妻は旭川の農家の出身です。その親戚も農家が多いのですが、この農業の厳しい時代ですから、数年前にその一人が経営に行き詰まってかなり大きな借金を抱えてしまったことがありました。ある日、親戚一同集まってこれを返すにはどうしたらいいか、農協から新たに融資を受けるのに親戚一同で連帯保証をして何百万というお金をみんなでかぶろうと相談しあうのです。このように、今でも血のつながりで一緒にやってゆこうという、血縁の共同体はないわけではありません。しかし社会全体として、そういうつながりは薄れていっているのが現実だと思います。

地縁共同体

地縁共同体、つまり同じ土地に住んでいる人の共同体を、パッとイメージしておわかりいただけるのは、「寅さん」ですね。フラフラどこかへ出て行った「寅さん」が葛飾柴又に帰ってくると、あの街の、近所のおっちゃんとか住職さんとか皆で出てきて「よく帰ってきたな」とかワイワイいいながら、ご飯食べたりするわけです。そういう、同じ街に住んでいるがゆえのつながりが、映画の中では生きているわけです。これも昔はそんなに珍しいものではなかったと思います。近所の家のことなら、今夜のあの家の御飯のおかずは何だとかいうことまで皆わかっちゃうというような関係ですね。

北海道では戦後さかんに石炭が掘られて、炭鉱町があちこちにできました。炭鉱町の人たちは、日本のあちこちから来た人たちですから血縁のつながりはないわけですが、炭鉱町という地縁のつながりでみんなで助け合うきずなが非常に強い町でした。

今「フラガール」という映画が公開されています。常磐炭鉱で、炭鉱がつぶれていく中、それに代わる産業として「常磐ハワイアンセンター」をつくるという話ですけれども、当時の炭鉱の生活のある面をよく描いている映画だなと思いました。皆で一つの街で助け合っていく生活がいきいきと描かれています。

これら、いろんつながりで人が一緒に生きてゆく共同体は、何かを共有する、分かち合うというきずなをもっています。分かち合うものはいろいろです。例えば誰かが稼いだらそのお金で皆がいっしょに生きてゆく。今でも「家族」というのはそういうものですよね。お父さんなりお母さんなりが稼いできたら、子供もみんなそれで食って行くわけですから。そういうふうに、所得を共有するのが「家族」という一つの共同体です。その範囲がもっともっと広がると、大変な大きな大家族、誰かが稼げばみんなで食って行く共同体、わかち合う共同体になります。

共有するのはそういうものだけではありません。炭鉱の町だったら、みんなが炭鉱で働いているという労働を共有し、そこでもし事故があったらどうしようというおそれを共有し、これからは炭鉱も斜陽になってつぶれて行くかもしれないという不安を共有し、私たちはこういう体験をともにしてきたという歴史を共有します。ほかとは違う独特の言葉を共有することもあります。さまざまなものを共有しわかち合うつながり、それが一つの共同体です。

共同体＝メンバーを選べない

もう一つ、共同体の大きな特徴は、その共同体に誰が加わるか、お互いを選べないということだと思っうんです。

私は、五人兄弟の長男です。小学校に入った時に一番下、五人目が生まれています。ゴチャゴチャと一緒に育って、「兄弟げんかは鴨の味」ということわざも今でこそわかりますが、こどもの頃は、なんでこんな兄弟がいるんだろうと腹立たしかったものです。たとえば誕生日ケーキも、一人っ子なら存分に食えるのに、うちだったらそれを五等分しなきゃならない。五等分って、パツと出来ないですよ。だから、6つか、あるいは8つに分けます。5人が一通り取った後、残りをどう分けるかということで、大変な生存競争があったりして、ああなんでこんな兄弟と一緒になんだろう、もっとやさしくて可愛い妹だったらよかったのにとか、もっと兄貴を立てるおとなしい弟だったらよかったのにとか、思ったものです。まあ、妹や弟も、こんな兄貴なんか、と思ってたでしょうが。兄弟姉妹というのは選べません。これは血縁共同体の場合ですが、地縁による共同体でも、何で隣はあんな人なんだろうと思っても、選べない。与えられてしまっている。これが共同体の一つの特徴ではないかと思うのです。

現代＝繋がり希薄化

こういう、無理やりにでも一緒にさせられるという人間関係が、血縁社会の中にも、地縁社会の中にもいろいろあったはずですが、今は、そういうつながりというのはどんどん希薄になってきていることをしばしば体験します。

旭川の教会に赴任しました時に、その教会の牧師は幼稚園の園長を兼ねるということになっていましたので、11年間園長をしていました。毎年、お母さんたちの集まりで、「皆さんが初めて、(1)赤ちゃんのオムツを換える、(2)赤ちゃんを寝かしつける、それから(3)ミルクを飲ませる、この三つのことをやったのは何歳の時でしたか」と尋ねていました。

幼稚園のお母さんたちですから、20代から30代の年代です。ここにいらっしゃる皆さんは、何歳くらいの時これらを初めて経験したでしょうか。私は、さっき言いましたように、一番下の妹が、私が一年生の時に生まれてますので、そのオムツを変えたりしました。ですから私は、6～7歳の時にそれらを体験しているんです。

お母さんたちには、三つに分けて答えを聞きました。18歳までにそのことを体験した方、18歳から（学校などで実習で経験する場合がありますので）実際に自分の子供が生まれるまでに体験した方、そして、自分の子供が生まれて、それで初めて経験した方、と、それぞれ手を挙げてもらいます。

はじめて幼稚園に携わった頃、今から14年くらい前には、だいたい18歳より前にそれを体験したという方が半分ぐらいで、18歳から自分の子が生まれるまでと、自分の子が初めて、という方を合わせて半分ぐらいでした。ところが、この10年ぐらいの間に、18歳より前にこれらを経験したという方の数はどんどん減ってきました。最近では、18歳より前にこれらを経験した人は四分の一もいないんです。自分の子供で初めてそれを体験したという方が半分近い。今のお母さんたちは、いってみればぶっつけ本番で親になるわけです。赤ちゃんに触れたことがないのに、いきなり自分の子を世話しなきゃならない。

皆さんはどうだったでしょうか、たぶん、自分の子供の世話をする前に、例えば親戚とお正月にあったときにその子供の世話をするとか、あるいは隣近所にそういう小さな子供がいて面倒をみたりと、いろいろな場面で、そういう自分よりずっと幼い子を世話をしなきゃならないという場面を体験したのではないのでしょうか。今や、それがどんどん少なくなって来ているのです。

もう一つ、お母さんたちに「皆さんには10歳年齢の違う友だちがいますか」と聞いてみました。たとえば30歳の方が、子育てのことなどを相談できる10歳年上の40歳の友人がいるとか、逆に、10歳年下の20歳の人から、「今、進路のことで迷ってるんだけど」というような相談を受けるということがあるのでしょうか。10歳年が違っているけれども信頼して相談できる関係の友達というのは本当に少ない。これがたとえば高校生とか20歳ぐらいの方になると、10歳年の違う30歳の友達とか、あるいは10歳年下の小学生の友達があるかと尋ねてみたら、これは極端に少ないのではないかと思います。年々、そういう10歳年の違う友達を持っている方は減って来ている。

今の日本の社会の中では、一方で携帯電話とかインターネットとかが発達していながら、人とのつながりというところではたいへん深刻な状況になっています。

旭川は、寒いところです。1年のうち半分雪に閉ざされて、冬は3ヶ月間一度も温度が零度を上回らないという所です。しかも旭川という所はわりあい転勤族が多いのです。幼稚園ぐらいの子供を持った若い世代の家族が、北海道内からならともかく、北海道の外の本州から、生まれただけの子供も抱えて引っ越して来るわけです。

旭川には、いまだに皆さん結構すごいイメージを持っておられます。私も旭川に赴任する時に、「街の中に熊が出るんでしょ」とか、「みんな馬に乗ってるんでしょ」とか、ひどいことを言われましたが……。おそろしいほど寒く厳しいイメージをもって、地の果てと思いで赴任して来て、友達も知ってる人もなく、冬になるとマンションの中で過ごします。外に出るとマイナス10度、20度という世界ですから、子供を抱えて外に出るなんて、もうとんでもない話で、半年間本当に家の中で閉じこもるような生活をしているお母さんと子供というのが多いんです。頼みのお父さんは仕事ですから家にいないし、お母さんも幼稚園関係以外には知ってる人は誰もいない。共同体として人と出会う体験が全然ない。そんな中で子供たちも本当に縮こまってしまふ。そういう家庭を見てきて、いろいろなことを共にわかち合って行く人のつながり、共同体というものがいかに大事かをひしひしと感じたのです。

キリスト教の従来メッセージ＝神の前に立つ個人

そこで、日本の近代のキリスト教の歴史をもういちど振り返ると、これまでは、人々を縛っていた共同体のしがらみから個人というものを解放していく、というのがキリスト教の果たしてきた大きな役割でした。ところが今は、時代の方がそれより先に行ってしまう、もはや共同体そのものがなくなってしまっている状態で、その社会の中で、一人一人がそれぞれ、寂しさ、孤独、孤立、不安の中に取り残されているという現状ではないでしょうか。だからこそ、若い人たちは暇さえあれば携帯とかメールで人とのつながりを何とか得たいという欲求・渴望の中にあるのではないかと思わされます。

ところが、これまで日本のキリスト教が発信してきたメッセージは「人は一人で大事なんだ」「人は一人で共同体のしがらみから解放され、ただ一人で神様の前に立つ個人として生きて行くんだ」というものでした。するとどうなるでしょう。そんなことを言われるまでもなく、一人一人はバラバラになっちゃっている社会の中で、「君は一人なんだよ」と、今さら言われたって、嬉しくもありがたくもありません。では、キリスト教はこんな社会に対して、今どういうメッセージを伝えることができるのでしょうか。

キリスト教の新しいメッセージ＝神の前に立つ個人をつなげる共同体

ここで、聖書の言葉を読んでみたいと思います。旧約聖書のはじめの創世記です。神さまが、人間を土の塵から作ってエデンの園に置いた時にこう言います。「人は一人でいるのはよくない。彼に合う助けるものを造ろう」と。これは結婚式でよく読まれる箇所ですね。ただ、この聖書の言葉には、結婚のことだけではなく、もっと奥深いものがあると思います。神様が「人が一人でいるのはよくない」と言っているのです。人間というのは一人では良くないんだ、人間というのはたった一人では生きていられないんだ、別の人間と出会い、交わり、一緒に生きてゆく、それがどうしても必要なんだ、ということです。一緒にある、助けあう、人と人とのつながり、「共同性」の中で人は生きてゆくのだから、神様は人をそういうふうにしたのだ、ということが、この聖書の箇所を示されていると思うのです。

そういう目で聖書をずっと読んで行きますと、人が、つまり一人一人の個人が、いかにして結び合わさって共同体を形作って行くことが出来るか、というのが聖書のもう一つの大きなテーマであることに気付かされます。

よくご存知だと思いますけど、旧約聖書に書かれた大きな出来事のひとつに、エジプトで奴隷であったイスラエルの民がモーセに連れられてエジプトを脱出し、約束の地カナンに戻って行くという出エジプトの出来事があります。エジプトからカナンと申しますと、実は大した距離ではないんです。数日もあれば歩いてでもいけるそうですが、それをわざわざ40年もぐるぐる迷ったということが書いてあるんです。何で40年もかかったか、何のために神様は40年もかけたのか。その40年の間に、神様はそのイスラエルの民に、律法つまり生活の指針を与えて、それまで奴隷であったイスラエルの民が神の民として一つにまとまっていっしょに生きてゆくようになるために訓練をなさせたのがその40年間なんです。それまで奴隷としてばらばらにこき使われていた人々が、「これからは私たちは神の民として、一つの共同体として生きてゆくんだ」という意識を与えられ、その基盤が築かれたのが出エジプトの出来事でした。

その後、旧約聖書には、「神の民」、まさしく民＝共同体が、どうやって一緒に歩んでいったかといった歴史が延々と書いてあります。

そして、新約聖書の時代になるわけですが、そこで記されているイエス・キリストの福音というのは、やはり一人一人に伝えられるというよりは、12弟子というグループに伝えられているんですね。それが

基になって教会というさらに大きなグループ、共同体が形作られていきます。その共同体、新しい「教会」という共同体が、どんなふうにならされていったかということを書き記すのが『使徒言行録』ですね。そしてまた、その新しい共同体がどうあるべきかが、新約聖書のさまざまな「手紙」のなかで教えられているのです。

このように、これまでの日本のキリスト教の歴史の中では、神様の前にむしろ一人で立つという個人的側面、個人の大切さがむしろ強調されてきましたけれども、本来キリスト教の中には、そういう一人一人がなおいっしょになって共に生きてゆく、共同体として、共同体を形作って、歩んでいく、そのことが大きなメッセージとして語られているのです。

「一人じゃないよ」＝ウィリアム・クアレックの絵

今日の「一人じゃないよ」という講演題も、キリスト教というのは、人は一人で生きていくということだけでなく、一緒に生きていくんだということを示すものなんです。実はこれ、オリジナルではないんです。ここで、『一人じゃないよ』という題の本を紹介したいと思います。素朴なタッチの絵が掲げられています。日本ではあまり知られていないんですが、ウィリアム・クアレックというカナダの画家の絵です。もう亡くなっていますが、カナダではとてもよく知られた画家だそうです。この本の著者は、星野正興という牧師ですが、この本が、日本で初めてクアレックを本格的に紹介した本なんだそうです。

クアレックの画には、こんなふうにかナダのいろんな生活風景が描かれています。その中に後光がさしている人が何人か描かれています。よく見ると、たいがい赤ちゃんを抱っこしている女の人や、後光がさしている。おわかりですね、クリスマスのイメージです。カナダのいろんな風景、それも、あまりはなやかではない、地味な、あるいは非常に寂しい情景、日常のとりわけ困難や不安の状況の中に、後光がさしている赤ちゃんとその親、つまりヨセフとマリアと幼子である赤ちゃんのキリスト（聖家族という言い方をしますね）がさりげなく描かれています。

たとえばこの絵は、カナダの郊外の林です。遠くの方に非常に明かりのまばゆい街、立派なお邸が見えています。ところがこの手前の林の中ではホームレスの男の人が野宿しています。そのかたわらで、後光のさした女の人と赤ちゃんが手を差し伸べている、そういう絵です。

こちらは、たぶん、教会ですね。教会でやはりホームレスの人たちに、給食をして食事をしている。そういう食堂の中に、気がつく、やはり夫婦と赤ちゃんが後光をさして混じっている。そういう絵です。

つまりこれは、キリストは、そういう苦勞、困難、不安、孤独の中にいる人々のかたわらに、人の姿で共にいてくださるというメッセージ、非常にキリスト教的なメッセージを含んでいる絵の数々なんです。

こういうふうには、私たちは一人一人、どんなにこの世の中で寂しく、孤独で、不安であろうとも、でも一人じゃなくて、神様が、キリストが共にいてくださるのだ、というメッセージは、キリスト教が最初からずっと持って来た、だいじなメッセージだと思うのです。

インマヌエル＝神は我々と共に居られる

新約聖書の最初、クリスマスになると必ず読まれるマタイによる福音書の1章に、「『見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』この名は『神は我々と共におられる』という意味である。」とあります。神様というのは本質的に「インマヌエル」（我々と共にいてくださる）なのだ、それが神様だ。だから、私たちは一人ぼっちではない。「一人じゃない」。これがそもそもはじめからのキリスト教のメッセージとしてあるのです。

このことは、クリスチャンとして生活を送ってこられた方なら、どこかで味わって来られたことではないかなと思います。孤独や不安の中で、しかし、祈りの中で、「あ、神様が私と一緒にいてくださる、イエス様がわたしのかたわらにいてくださるから、わたしはひとりじゃないんだ」ということを、はっと感じる、悟る、実感するということは決してまれな体験ではないと思います。

マーティン・ルーサー・キング牧師

一つだけよく知られた例を挙げたいと思います。

1960年代にアメリカで人種差別と闘ったマーティン・ルーサー・キング牧師ですが、その活動を公に始めた頃、大変な脅迫や迫害を受けました。ある日、講演から戻ってきたら、自宅に爆弾が投げ込まれ、家が爆破されていたことがありました。しばらく前から脅迫の電話や手紙が来ていたので、家族はよそに行っていたために幸い被害はなかったんですけども、キング牧師自身はそのことで大変なショックを受け、危険の中でこれからも活動が続けることが出来るかどうか、大変悩むんです。そして夜そんなことを考えて寝つかれず、ベッドから起きてきて、台所でコーヒーを入れて飲もうとしました。そして、思わずその場でコーヒーカップの上で手を組んで、一生懸命神様に祈ったというのです。その時に、キング牧師は、神様が今ここに、わたしのところにおられる、だから私は恐れることはない、孤独ではない、不安に陥ることはないということを、神様のメッセージとして、はっと感じ取って、そこから脅迫や迫害に負けずに向かってゆくエネルギーを与えられたということを自身で書いています。これは、キング牧師の「コーヒーカップの上での祈り」として、大変よく知られた出来事です。

そんなふうにキリスト教は「一人じゃない」「あなたは決して一人じゃないんだ」という、神との共同性をメッセージとして持ってきていました。

靴屋のマルチンの話

そしてまた、そのことを通して、「人と人とは共にいることが出来るんだ」というのもキリスト教の大事なメッセージです。

一番わかりやすい話は、皆さんもよくご存知の、ロシアの文豪トルストイの短編、「靴屋のマルチン」のお話だと思います。貧しい靴屋のマルチンが信仰深く一生懸命聖書を読んでいると、イエス様の声が聞こえて、「明日お前のところへ行くよ」と告げられます。翌日、イエス様が来られるのを朝からそわそわと待っていても、いっこうにそれらしい人は来ない。通りがかりの貧しいリンゴ売りのおばあさんとか、そのリンゴをかつぱらって逃げた子供とか、お隣のおじいちゃんが一生懸命雪かきをしてクタクタになっているとか、そういった、何てことはないみすぼらしい人たちが目の前を通り過ぎるだけです。それでも、心優しいマルチンは、おじいさんに「お茶を飲んで暖まって行きな」と勧めたり、リンゴ売りのおばあちゃんと少年のけんかに「まあまあ」と仲裁に入ったりします。夜になっても、いっこうにイエスさまは来ない。がっかりしながら床につこうとすると、イエス様の声がかたまたま聞こえてくるんです。「あれが私だったんだよ」と言って、きょう出会ったいろんな人の姿が見えてくるんです。

つまり、キリストというのは人間の姿をとって、あるいは人間と人間の間に、現れてくださる。そのようにキリストがいてくださるから、人と人とは出会い、つながることが出来る。それが、このトルストイのお話のポイントです。それはまた、キリスト教のメッセージの大事な部分であると言えます。私たち

は、神様が共にいるから一人ではない。また、それだから、私たちは他の人たちともいっしょにすることが出来る。これが聖書の伝える大事なメッセージなのです。

出会う人は選べない

さて、ここで大事なのは、そのように出会う人を、私たち自身では選ぶことができないということです。とても素敵な、見るからにすばらしい、いっしょにいたら自分も自然と高められるような、立派な人とばかりと出会うのが共同体ではないのです。なんであんなやつが隣にいるんだろうとか、なんであんな人を兄弟姉妹と呼ばなきゃならないんだろうとか思ってしまうような人たちが、なぜかいっしょにさせられていて、自分では選ぶことができない。その中で、苦しんだり、悩んだり、いいことがあったり、嬉しいことがあったり、つらいことがあったり、いろんなものを一緒に食べたり、いろんな体験を一緒にしたり、同じ歴史を一緒に歩んだりして、同じものを分かち合っていくところに共同体としての新しい関係が形作られていくことになるのです。私たちが、そのように受け止める時に、まさしくその人と人との間にキリストがいてくださるということを学ばなければなりません。

神様のおられる場所＝人と人との間

もうひとつ、新約聖書のエフェソの信徒への手紙 2 章 18 節からお読みします。「このキリストによってわたしたち両方のものが一つの霊に結ばれて、御父に近づくことが出来るのです。従って、あなた方はもはや外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、使途や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石は主キリスト・イエス御自身であり、キリストにおいてこの建物全体は、組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです」。

これは教会について教えている言葉ですが、ここに「あなたがた教会というのは、聖なる民、神の家族」とあります。「民」とか「家族」とは、まさしく「共同体」のことです。あなたがた教会員というのは、家族のような共同体なんだよ、選ぶことが出来ないし、一緒にいろんなものを分かち合っていくべき家族なんだよと言うことが言われているのです。

またここで面白いのは、教会を建物にたとえていることです。「主における聖なる神殿」、「あなたがたも共に建てられ、神の住まいとなる」とあります。さて、「あなたがたは神の住まい」と言われたとき、あなたがたのどこに神様が住んでいるとイメージするでしょうか。多くの方は「わたしの心の中に神様が住んでくださる」というふうに受け取ります。しかし、そうではありません。「あなたがた」が建物になる、その中に神様が住まうのです。ここでいう「建物」は、聖書の時代ですからギリシャ・ローマの遺跡などをイメージしていただきたいのですが、大きな石をどんどん積み上げて作られる建物です。「あなたがたは組み合わされて」というのですから、人間一人一人が石になぞらえられているのです。たくさんの石が組み合わされて建物ができたら、その中に生じた空間に神様が住むのです。決してひとつひとつの石の中に神様が住むわけではありません。人間どうしが共同体としてつながって行ったときに、初めてその間の空間、つまり人と人との間に神様が住んでくださる。少なくともこの聖書の箇所では、神様は私の心の中に住むということではなく、あなたが他の人と組み合わせられ、つながる時に、その間に神様がいて、つまり、共同体という人のつながり、関係の中に神様がいてと教えているのです。

実は、さっき紹介した「靴屋のマルチン」のお話ですけれども、本当は「靴屋のマルチン」というお話ではありません。トルストイは別の題名をつけていたのです。どういうわけか、他の国の言葉に翻訳される時に「靴屋のマルチン」という題名が付けられ、そっちの方がむしろ有名になってしまいました。もとの題は「愛あるところに神いましたもう」といいます。まさしく、人と人とが結び合っていく、その愛のあるところに神様がいて、そういう題名だったので。

教会のメッセージ=人と人との共同体

キリスト教の持っているメッセージは、つまりは、人と人とが、与えられた相手と一緒に生きてゆくんだということなんです。教会では、いみじくも相手のことを兄弟姉妹と呼び合うならわしがあります。それは、まさしく相手を選べないということを表しているよびかただと思います。神様の前に大事な個人としてある一人一人が、なぜか集まって共同体としていっしょに生きてゆく、それが教会という共同体なのです。

教会が共同体であるための仕掛け

この、教会が一つの共同体であるということを形作っていくたくさんの仕掛けがあります。

礼拝

まずは礼拝そのものです。

私の知っている人で面白い人がいました。40代で独身の男の人でしたが、「私は礼拝大好きなんですわ」と言って、礼拝が毎週一回だけというのではとても物足りないので「私、毎日礼拝しとるんですわ」と、住んでいるアパートの部屋の一角に壇を作り、十字架を置いて、礼拝をやっているというんです。声が大きく、教会でも讃美歌のときには朗々と歌っている人でしたが、「私、毎朝ひとりで讃美歌うたって、お祈りしとるんですわ」と得意そうでした。アパートの近所の人にはさぞ迷惑だったでしょうね。教会の礼拝ではまわりに人がいるとかえって邪魔で、一人で礼拝したほうがずっと気持ちいい、と張り切っていたんです。

でも、どうでしょうか。礼拝というのは本来一人でするものではないのです。礼拝は、わざわざ皆で集まってするものです。ですから、礼拝のプログラムの中には一人では出来ないことがいっぱいあります。

讃美歌

讃美歌は、たった一人、がらんだりの部屋の中で歌うものではありません。皆で声を合わせて一緒に歌うことがだいじなのであって、そういう歌として作られ、歌われてきています。

ある教会の話です。新しく赴任してきた牧師は、どうも礼拝の雰囲気を変だと思いました。気付いたのは、讃美歌を歌う時に、皆がかかってに歌っていることです。もちろん、オルガンの伴奏もあるのですが、それもまた好きなように朗々と弾いて、歌う人も自分の好きなように歌ってしまうので、盛り上がる部分とか、出だしの部分とかも、てんでんバラバラだったのです。それはおかしいと思った牧師は、讃美歌練習から始めたんです。そして、歌声がそろそろようになっていくにつれ、私たちは皆一つの仲間なんだ、共同体なんだということをだんだん味わうようになり、お互いの結びつきというものが強くなっていったそうです。

交読文、主の祈り

そのほかにも、例えば交読文を朗読する時にも、自分勝手に読んだら、そろわないでバラバラになってしまいますね。最近、お祈りも、皆に文章を配って皆で読むということをしているところもあります。

わたしのいる札幌北部教会では毎週の礼拝で、子供たちといっしょに讃美歌62番の主の祈りを歌います。子供たちが「天にいます私たちの父」と歌うと、大人たち皆で「私たちの主よ」と歌います。これは”Call and response”（コール・アンド・レスポンス＝呼びかけと応答）という歌い方ですが、これを一人でやったって面白くありません。皆でやるから本当に心わきたたせる力がある歌なのです。

そのほかにも、礼拝には、私たちは一人でのいるのではなくってみんなといっしょに生きているんだということを味わう要素がたくさん含まれているものなのです。

教会の中での交わり

深い交わり

礼拝だけではなくて、また教会の中では「交わり」ということを言います。たとえば、愛餐会などで食事を一緒にするという事は、まさしくみんなで一つのことをわかち合う、体験をわかち合うということです。

さらにまた、苦しみの体験、嫌なこともどれだけ分かち合うことが出来るか、ということも大切なことです。それは、簡単に言ってしまうと、お互いにどれだけ迷惑をかけることが出来るかということなのです。迷惑をかけちゃいけないと思いつながらのお付き合いというのは、実はとても浅く、表面的というべきではないでしょうか。あの人には、申し訳ないんだけど甘えることが出来るんだ、迷惑をかけたって何とか出来るんだ、という関係というのは、それだけ信頼しあえる強い絆が出来ているのだと思います。

これまで、教会では、一人一人がしっかりと信仰を持って、一人でしっかりと生きていけるように、と強調されてきました。もちろんそれはすごく大事なことです、それと共にまた、そういう一人一人がどれだけ深いところまでいっしょに生きていくことが出来るか、それがこれからのキリスト教の課題でありポイントであろうかと思えます。

楽しい交わり

東京の下町の、そんなに大きくない教会の牧師から聞いたことです。その教会では、毎年夏に、東京の西の山の中の山荘を借りて一泊の研修会を行っているそうです。下町から山の方へ、東京都の端から端へ、中央線にのってがたごとと行くこととなります。大人も子供もみんなで行くのですが、うきうきと遠足みたいにがやがやとはしゃいで行くわけです。途中、乗り換える駅のホームでも、「おやつ買って来い！」なんて騒いで誰かが売店に買いに行ったら、その売店のおばさんが、「失礼ですけど、お宅さん、どういう団体ですか」と尋ねてきたんだそうです。つまり、毎日ものすごい数の人を見ている駅の売店のおばさんから見ても、そんなふうな、子供からお年寄りまで、男も女もみんないっしょになって楽しそうにがやがやしている集団というのは、あまり見たことがないということなのです。

でも、教会とはそういうところではないでしょうか。今この時代、人と人とのつながりがどんどん薄れてしまっているこの社会で、しかし教会というところにはいろんな人が集まって来て、一緒に喜んだ

り、楽しんだり、嘆いたり、傷ついたり、苦しんだり、悩んだりしながら、何とかかんとか一緒にやっています。そういう共同体は今や日本の社会の中では大変珍しく貴重な存在になってしまっているのです。

キリスト教は、こういう共同体を形作っていくということを、本来の大切なこととしてきました。これから、いっそう自覚的に、教会とは、そういうところだということをアピールしてゆくことが出来るのではないのでしょうか。

信頼とわかち合い

それはまず、教会の中で、教会に来ている人同士が、互いに一緒にやっていくという深い交わりを、お互いを信頼しあい分かち合っていくことを、どれだけ出来るかということが課題です。

はじめて赴任した旭川の教会で、驚かされたことがあります。

月に一回、婦人会の集まりがあり、ある時、20人くらいで聖書の勉強をしていると、婦人会のあるメンバーが、ばたばたと泣き声で駆け込んで来ました。皆が「どうしたの」と尋ねると、「昨日、同居している母親と、子供の教育のことでけんかをしてしまった。子供をきちんと注意しようと思って叱っていたら、母に『そんなにきつくするもんじゃない』と言われて・・・」と泣くのです。するとみんなが口々に「いや、そんなこと言われたって、気にするんじゃないよ」とか、「お母さんはお母さんでちょっときつところあるしねえ」などとなだめるんです。ところが、実は、そのお母さんも熱心な教会員で、みな家族ぐるみよく知っているのです。お母さん夫婦も、この奥さん夫婦も、子供たちも、みんな教会に来ていますから、「うちでこんなことがあって」というと、皆がその細かい家庭内の事情までよくわかるのです。それで、経験豊かなおばあさんが、「よしよし、人生ってそういうことあるんだ」とか、「あんたもいっしょうけんめいやってるから、いいじゃない」とか言いながら、じゃ、お祈りしましょうということになって順番に、「この家庭を支え祝福してくださいますように」などとお祈りするんですね。信徒どうし、家庭のことまでさらけ出すような深い交わりがあるのです。

生活の問題も

また、逆の意味で驚かされたことがあります。教団で、全国各地で農業に携わっている人たちの集まりをしたことがあります。あちこちから集まってもらった農にかかわる人々が、今の厳しい社会状況の中で、信仰に支えられて農に携わっている経験を話し合いました。そのなかで、西日本からきたある人が、「私は農民信徒のひとりとして教会に通っているが、教会で、自分の生活や農業のことなどは一度も話をしたことがない。教会で農業の話が出来るとは思ってもみなかった」と言われたのです。大きな教会ではなくて、農村の中の教会なのに、生活で苦しみ、悩んでいることを分かち合うことができない、あるいはそうすることをしない教会があることに驚きました。教会という共同体の中で、日々の生活の中の思いをどれだけみんなと分かち合っていくことが出来るか、それが、これからの教会の、あるいはキリスト教の力としてはとっっても大事なことではないのでしょうか。

教会と教会との繋がり

これは、ひとつの教会の中の信徒どうしの関係だけではなくて、教会と教会の関係でも言えます。教会どうしで、どれだけものを分かち合うことが出来るのでしょうか。

札幌北部教会には壮年会があって活発に活動しています。ちょうど今日は、壮年会の教会訪問の日なのです。北海道の地方の過疎地では、礼拝出席者 10 人に満たない小さな教会がたくさんあります。そういう教会をみんなで支えようじゃないか、と言って、壮年会では年に何回か、そういう小さい教会へ出かけて行って礼拝を共にするのです。でかけて行くと「よく来てくれました」と歓迎してくれますし、そうやってよその教会へ行った時は礼拝献金もいつも以上に献げたりして、実質的に支え合う力になっていきます。当然、こちらの教会の出席者の数は減りますが、自分の教会の出席が減っても仲間の教会が元気になるような支え合いを試みているのです。

教会を超えた繋がり

そんなふうに、わたしたちは神様がいっしょにいるから一人じゃないし、また他の人と一緒にやっていくからひとりじゃないんだ、というメッセージは、ひとつの教会の中だけではなくて、教会と教会のつながりにも現れることです。さらに、そういう教会生活の中でつちかわれた、「私たちはたった一人で生きてゆくのではなくて、人と人と結び合っついでいっしょに生きてゆくことが出来るんだ」という「共同性」のメッセージは、教会の枠をも超えて、この社会のいろんなところにも力を及ぼしていくことが出来ると思います。

「いのちの電話」という電話相談の働きがあります。市民のボランティアによる働きで、孤独の中で相談相手もない人たちに、電話での相談という、人と繋がりを提供しています。全国の「いのちの電話」で、キリスト教関係者が多く関わってきています。もちろん、「いのちの電話」は、さまざまな宗教、あるいは宗教に関係のない人と共に形作っている運動ですが、このなかにも、キリスト教が大切にしてきた、人が一人で生きるのはよくない、いっしょにつながって行くことが出来るんだ、そういうメッセージがあらわれていると思います。

これに類した、人と人とが共に生きて行くためのさまざまな働きは、教会の枠を超えて広げてゆくことが出来ると思います。その中で、キリスト者自身も、「ああ、そうか、キリスト教というのは、それだからこそ、この時代で、社会の中で大切なのだ」と気づかされているのではないのでしょうか。この地にも、「ああ、わたしは一人じゃないんだ」といったことが味わえるような、そして「あなたも、一人じゃないんだよ」ということを伝えて行けるような、そんな温かい愛のメッセージをますます豊かに伝える教会が形作られていったら素晴らしいことだと思います。

つたない話をお聞きいただき、ありがとうございました。